
韜晦の想い

羽村奈留

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

韜晦の想い

【Nコード】

N8664H

【作者名】

羽村奈留

【あらすじ】

第二次世界大戦。1944年の10月。15歳の二等兵は「一人一殺」の少佐の命令に従い、アメリカ兵士と戦い、戦利品のアメリカ軍の無線機から聞こえる相手と会話をしていくうちに、衝撃の事実を知る事になる。その後、二等兵が選んだ選択は？

第1話（前書き）

この物語は、実話を基にして作られたフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。

韜晦^{とうかい}

- 1 自分の本心や才能・地位などをつつみ隠すこと。
- 2 身を隠すこと。姿をくramsすること。

第1話

アンガウル島。

パラオ環礁の外にあり、激しい波が打ち寄せる。一見すると近寄りがたい島である。

平成の現在の人口は約百五十人。現在も人口は減少しつつある。

島民の足となっている不定期で出向する船か、民間の小型飛行機をチャーターするしかないアンガウル島は、世界から切り離された楽園と思うほどの青緑色の海が広がり、起伏の無い平坦な陸地は足に優しく、富豪が隠れるには絶好のバカンスの地となっている。

ただ残念な事は、アンガウル島は日本にとって、とても関係が深い島でありながら、多くの日本人が知らない島だという事だ。

第十四師団配下宇都宮歩兵第五十九連隊。

明治に編成されたこの連隊は、戦争になると出動し、いくつもの成果をあげてきた。明治時代からこの連隊は常に栄誉に包まれ、五十九連隊に入隊した兵士の誇りでもあった。

第二次世界大戦のあの時まで。

時は、一九四四年。

日本領土であるアンガウル島の防衛のため、歩兵第五十九連隊第一大隊が派遣された。

最初は日本軍有利と思われた戦争も次第に劣勢になり、日本の領土になつていった島はアメリカ軍に占領されていき、当然日本からの物資の補給がなくなり、餓死者が出る中で、ついにアンガウル島も九月にアメリカ軍の知る人ぞ知る山猫部隊と呼ばれる八十一歩兵師団が上陸し、想像を絶する激戦が繰り広げられていた。

同年十月。

歩兵第五十九連隊第一大隊をまとめていた後藤少佐は、日本の領土となっているアンガウル島を死守する意志を兵士たちに伝え、「一人一殺」

日本人が得意とする銃についている刀で相手を刺し殺すといった
白兵戦の指示を出した。

むらかみせいしろう
村上清四郎。十五歳。今年の十月末に十六歳になる彼は、肩の縫い目が下がり気味の大きいサイズの軍服を着て連隊の列に並んでいた。今年入隊したばかりの彼は、幼い事もあつて階級は二等兵。

最初、千三百人以上いた大隊の兵士は、上陸したアメリカ軍との戦いにより激減し、現在は約百三十人。

先月の九月から戦い続けている日本兵士は、島の至る所にある鍾乳洞に潜んで待ち伏せして幾度もアメリカ兵士を銃刀で刺し殺し、清四郎の軍服もアメリカ兵士の返り血で赤黒く変色していた。

第2話

後藤少佐は、一目できるほどに減ってしまった自分の大隊を、右から順に一人一人見た。

日本軍からの補給物資が途絶えて数ヶ月。兵士の顔は頬骨が浮き始めている。既に体調を崩して死んだ兵士もいる。生き残っている百三十名の兵士では、次の戦いが最後になるだろう。

後藤少佐は、陽が西に傾いている空を見上げた。日本の夏空にもある入道雲が見える。自分が生まれ育った土地を懐かしみ、同時に感じる切なさや悔しさで、目蓋を熱くしながら、だけど目下の兵士には気取られないように、ピンと張った声をあげた。

「全員気付いていると思うが、次の戦いが最後になる。我々は命を懸けて、次に戦う日本軍のために、できるだけ多くの敵を倒しておかなければならない。十九日の今夜、我々は総攻撃を敢行する。必ず「一人一殺」を貫徹。時刻は追って知らせる。それまで、各自、心残りの無いように、過ごせ。以上だ！」

清四郎を含めた約百三十人の兵士は、後藤少佐に敬礼をしたあとに解散した。

解散といっても、アメリカ軍に囲まれている今、自由に行動できる範囲は限られている。栄養失調で体がだるい者は横になって眠り、銃器の整備を行う者もいたり、気の合う者と故郷の話に花を咲かせている者もいる。

清四郎はというと、日本がある北東に向って両手を合わせていた。「天国のお父さん。今夜、僕は、天皇様のために、一人でも多くのアメリカ兵士を倒し、日本男子として恥ずかしくないように、名誉ある死を遂げたいと思います。どうかお力をお貸し下さい。故郷のお母さん。兄。姉。弟。妹。お婆ちゃん。兵隊になった僕の友人たち。スルメが大好きなタマ。僕の分まで長生きして下さい」

長い祈りを終え、清四郎は瞳を開けた。日本を出国する前日に母

親に刈ってもらった頭髮は、前髪ができるほど伸びて、アンガウル島に吹く風で揺れている。まつ毛が長い凜とした表情は、日に焼けて浅黒くなっているも育ちのよさをうかがわせ、祈りを終えて立ち上がる行動も高貴な雰囲気漂わせていた。

村上清四郎の村上の姓は、母親の姓である。

母親の先祖は、戦国時代に活躍した村上水軍の一人。母親は知人の紹介で見合いをして栃木県の華族に嫁入りしたが、習慣の違いから姑と意見が合わず、逃げ腰の気の弱い夫にも嫌気が差して、清四郎が十歳の時に離婚していた。

清四郎は母親の籍に入れられたため、現在の村上の姓をなめるようになったのである。

第3話

清四郎は、傍らにあるリュックから握りこぶしくらいに膨らんだ巾着を取り出した。

巾着の中には、もしもの時にと母が用意した干し米が入っていた。きつく結ばれた巾着の紐を解いて中にある干し米を見る。どんなに腹が空いても、飢えて仲間の兵士が倒れても、誰にも知らせなかった干し米。

清四郎は、これを食べるのは今しかないと思い、硬い干し米を掴んで口に含んだ。

本来なら水である程度ふやかしてから食べるものである。

それをふやかさずに口に入れてしまったものだから、口内の内膜に干し米が貼り付いて食べにくい。清四郎は、水筒の蓋を開けると水を口に含み、薬を飲む要領で干し米を喉の奥に流し込んだ。飲み込みながら周囲にいる年上の兵士を見る。

日本からの物資が途絶え、餓死者が出ている時に、自分だけ食べているのが見つかったら、残っている干し米は取り上げられ、年上の兵士から袋叩きにされるからだ。

清四郎は見つからないように背を向けて残りの干し米を全部口に入れた。次に水筒の水を口に含む。また同じ要領で口の中にあるものを全部飲み込む。もう一口だけ水を飲もうとした時に、清四郎は名前を呼ばれた。

「村上二等兵。なぜ皆に背を向けている？」

清四郎の名前を呼んだ者は、佐山軍曹だった。背の高い佐山は、アンガウル島に来てから見る見るうちに痩せ細り、今ではツクシ軍曹とあだ名されていた。面倒見のいい佐山は、年下の兵士の兄的存在だった。

その佐山の声に驚いて、清四郎は水筒を地面に落としてしまったのだ。

水筒から水がこぼれ出している。

佐山は素早く水筒を拾うと、水筒口についた砂を払ってから蓋を閉めた。

「村上二等兵。もう一度聞く。なぜ皆に背を向けている？」

清四郎は、その場で立ち上がり背筋を伸ばした。

「先に亡くなっている父に、今夜の戦いの勝利を祈っております」腕を下ろし、手を広げてからズボンの布地に触れて、両サイドにある縫い目に沿って指を滑らせて、指の爪を地面に向けた。嘘はついていない。清四郎は自分にそう言い聞かせた。

佐山は回りこんで清四郎の顔を見た。

清四郎は、軍曹を直接見ては失礼になると思い、視線を下げた。これは目上に対しての昔の礼儀である。

佐山は、清四郎の胸辺りに拾った水筒を差し出した。

「勝利の祈りは、恥ずかしい事ではない。次からは堂々とやれ」

佐山は受け取るうとしない清四郎の手を握って水筒を持たせた。その時、清四郎は久し振りに佐山の顔を見た。

佐山は二十一歳。既に妻子がいる。守るべきものがある佐山に迷いは無く、佐山は清四郎と目が合うと、無言で頷いた。

清四郎は、佐山の表情を見て硬直した。それからすぐに目頭が熱くなった。立ち去る佐山の後姿を見ながら清四郎は軍服の袖で涙を拭った。

佐山は気付いていたのだ。清四郎が隠れて干し米を食べていたのを。そして食べ終わるのを待っていてくれたのだ。空腹なのを我慢して。

清四郎は、佐山の後姿に、十歳の時に別れた父の背中を見た気がして、天国の父にまた祈った。

「佐山軍曹の家族がいる日本を、どうかお守り下さい」と。

第4話

後藤少佐が決断した最後の総攻撃は、十九日の夜に敢行された。

清四郎ら約百三十人の兵士は、アンガウル島の無数にある鍾乳洞に潜み、夜という暗闇を利用して、現れたアメリカ兵を白兵戦にて減らしていく作戦に出た。

最初は仲間と鍾乳洞に隠れて、通りかかったアメリカ兵を倒していたが、アメリカ兵も手榴弾や火炎放射器で応戦してきたため、洞内での戦いは不利と判断した清四郎たちは、鍾乳洞を出て銃声が聞こえる中へ躍り出た。

しかし、次々に送り込まれてくるアメリカ兵に、清四郎たち旧日本軍はなす術も無く、清四郎がいた小隊も熱帯植物の陰に隠れながら戦ったが、一人二人とアメリカ兵の手に掛かり、現在の清四郎はアメリカ兵に追い詰められて一人で逃げ回っていた。

村上水軍にいた武士の血を引く清四郎は、母方の祖父から剣術の指南を受けていた。十五歳の清四郎だったが、剣術を知らないアメリカ兵相手に勝つのは容易で、清四郎は日本人特有の小柄な体型で敏捷に動き、暗闇の中、熱帯植物の大きな葉に隠れながら移動し、一人でいるアメリカ兵に忍び寄り銃刀で殺してから全力で逃げ去っていた。

「これで十二人だ」

そう言って満足する清四郎は、旧日本の教育方針により、アメリカ大陸の大きさを知らずに育った。島国の日本と違い、アメリカ大陸にはどれほど多くのアメリカ人がいるのか、清四郎は全く知らなかった。

夜でもねっとり肌に絡みつくアンガウル島を覆う湿気。熱帯雨林ならではの気候が清四郎の頬に流れる汗を増やす。

熱帯植物の木の陰に隠れながら、清四郎はアメリカ兵の返り血で赤黒く染まった袖で汗を拭う。袖は血特有の生臭さがあつたが、慣

れてしまっている清四郎は気にもせず、暗闇の中で幼い瞳をギラギラと光らせて、周囲の様子をうかがっていた。

視野が届くところには誰もいない。しかし、近くで銃声とアメリカ兵と思われる英語が聞こえてくる。まだ生き残っている日本兵と戦っているのだ。

清四郎は、屈んだ状態で音がするほうへ静かに移動した。日本兵を、仲間を助けようと思ったからだ。

暗闇が一瞬赤く染まる。火炎放射器を使ったようだ。

一瞬で終わった火炎放射だったが、清四郎の網膜には火炎の残像が残っていて、今も暗闇の中に光の影として見えている。

清四郎は瞬きをしながら更に移動した。

その時、ジッポライターの金属の蓋が開く音がした。ライターの炎が思った以上に近くに見える。

炎に映し出されたのはアメリカ兵の顔だった。ジグザグに折れ曲がった細いタバコをくわえて嬉しそうに笑っている。

その笑顔を見て、清四郎は悟った。先ほどの火炎放射で仲間が燃やされた事を。自分もいつかはあの炎で焼かれるのだろうか。悲しみと恐怖で清四郎は震える唇をきつく結び奥歯を噛み締めた。

あのアメリカ兵を倒さなければ、そのうち自分が焼かれてしまう。清四郎は、銃を縦にして構えた。弾は自決するために残しておかなければならない。ライターの炎で見えたのは三人のアメリカ兵。装備は火炎放射器のほかに銃や手榴弾もあるだろう。だが接近して戦えば、火炎放射器と手榴弾は使ってこないはず。また祖父に教わった剣術で武士のように戦えば勝てる。そう確信した清四郎は靴の爪先で地面の状態を確認しながら音を立てないようにゆっくりと歩いて更にアメリカ兵に近づいた。

第5話

三人のアメリカ兵は楽しそうに雑談をしていた。詳しい内容は分からないが、内ポケットから出した写真を見せているところを見ると、彼女が家族について話をしているようだ。

それだけならよかったのだが、アメリカ兵の足元に転がっていたのが、十体はあるの日本兵の焼かれた死体だった。

焼かれて炭化した手足は肉組織が萎縮して折れ曲がり、犬の死骸のように四つん這いになって倒れている。手足を空に向けて仰向けになっている者。横に倒れている者。土下座のようにうずくまっている者。黒い彫像に見える日本兵の肌は、ひび割れていて、割れた部分からは焼けていない赤い血肉が見えていた。

それは清四郎がアンガウル島に来てから何度も見てきたもの。だからもう泣く事はない。見慣れてしまった焼身に恐怖する事もない。殺し合いに慣れてしまった心は、なんの起伏も無く、仲間の日本兵の死を受け入れていた。いつか自分も同じように焼かれると分かっている。

「ふっ……」

清四郎は草むらの陰で呼吸を整えた。銃を縦に構える。そして一気に走り出した。

「日本万歳！」

清四郎があげた声に、驚く三人のアメリカ兵。

清四郎は、銃刀を振り回した。

火炎放射器を構えたアメリカ兵だったが、一人が左耳の下を斬られた。鮮血が噴き出す。

アメリカ兵が白目をむいて倒れていく横で、清四郎は二人目のアメリカ兵の喉を刺した。新撰組の沖田総司が得意とする三段突きである。

村上水軍の菩提寺の多くは、新撰組がいた京都にあるため、清四

郎の家系は沖田の天然理心流の影響を受けているようだ。

最後に残ったアメリカ兵は、死の恐怖を感じて自暴自棄になり、火炎放射器で応戦してきた。接近戦で火炎放射をすれば、自分自身が燃えてしまう危険があるのに、その判断がつかなくらいに清四郎を恐れて錯乱してしまったようだ。

清四郎は伸びてきた火炎を掻い潜ってアメリカ兵の懐に入り銃刀で胸の急所を刺した。

胸を刺されたアメリカ兵は、タバコをくわえていた。清四郎が銃刀を引き抜いた時、胸から血が溢れ出て、アメリカ兵の口が開き、くわえていたタバコを落としてから地面に倒れた。

耳の下を斬られたのと喉を刺された二人のアメリカ兵は既に息絶えていた。

胸を刺されたアメリカ兵は、まだ息があり、震える唇を動かして涙を流している。

「ママ……。パパ……」

清四郎も知っている父と母を示す英語。アメリカ兵にも家族がいる。しかし、殺し合いで凍てついてしまった清四郎の心に、アメリカ兵の両親を思う気持ちは届かなかった。

清四郎は、銃刀を下に向けた。もう一度胸の急所を刺してアメリカ兵にとどめを刺した。

引き抜いた銃刀から血を滴らせながら清四郎は移動して地面に倒れている日本兵を見て回った。

焼身の日本兵は、顔も焼けてしまっていて誰が誰なのかよく分からない。

清四郎は、日本兵やアメリカ兵の持ち物を調べて、使用できる弾や武器を確保した。ついでにアメリカ兵のポケット内にあったビスケットを食べる。水筒の水も飲む。

死体から略奪しないと生きていけないほど、清四郎は飢えていた。以前、先輩兵士がした略奪を見て、最初は躊躇った略奪行為。しかし、飢えというものは十五歳の少年の心を簡単に感化させた。ま

た次のアメリカ兵を殺せば、食料が手に入る。と。

第6話

辺りは静まり返っている。銃声も聞こえない。

清四郎は、満腹感を感じて焼身した仲間のそばで仮眠をとろうとした時に、微かだが人の声を聞いた。

「アンガウル島、ほぼ制圧。生き残りの日本兵の搜索を開始せよ」
言葉は英語だったが、華族の血を引く清四郎は多少の英語も分かるように育てられている。

「なんだって！」

清四郎は声がした方に走った。

声はまだ聞こえる。

「この調子でいけば、ペリリユー島も、直に制圧できる模様」

ペリリユー島は、水戸の精鋭である歩兵第二連隊が防衛にあたっている島だ。

「日本は、負けているのか？」

清四郎は、声がした所に駆け寄った。

声は、先ほど倒したアメリカ兵が所持していた無線機から聞こえたものだった。

清四郎は無線機を拾い、ほかのアメリカ兵に見つからないようにポリウムを下げてから、スピーカーの部分をつけた。

清四郎の耳に入ってきたのは、日本軍劣勢の事実だった。

「そんな……。四月に、大和が撃沈されていたなんて……」

四月は、清四郎たちの兵士がアンガウル島に配備された月。清四郎たちは四月末近くにアンガウル島に来たが、戦艦大和は四月七日に撃沈されていた。

旧日本軍は、最後の最後まで日本国民に戦いの劣勢の事実を知らせる事はしなかった。

そのため、当時の日本敗退のニュースに驚き涙した日本人は多い。
清四郎も驚いた一人で、戦艦大和が撃沈された事実は、先ほどま

で果敢に戦っていた清四郎を地面に崩れ落とすほどの威力があった。
「日本が負けるなんて……。今まで僕は、なんのために戦ってきたんだ」

ゲシュタルト崩壊。

清四郎が疑う事なく信じてきた偉大なる大日本帝国の虚像が崩れた瞬間であつた。最初の一人を殺した時から枯れてしまっていた涙が頬を伝う。

「日本が負ける。負けてしまう」

地面に平伏す。今の清四郎に、声を押し殺して辺りを警戒する冷静さはなかった。

何人ものアメリカ兵とやり合った村上水軍の血を引く勇敢な剣士は、親離れして間もない少年に戻ってしまった。

泣きじゃくる清四郎の目の前にブーツが映った。日本軍が配給した軍靴ではない。はつと気付いて清四郎が見上げると、清四郎が予想したとおり、アメリカ兵が立っていた。人数は二人。泣いている清四郎を無表情で見下ろしている。

向って右のアメリカ兵は中年の男性だった。左のアメリカ兵はまだ若く噛んでいるガムを小さく膨らましては割るという行動を繰り返していた。

第7話

中年の兵士は白い歯を見せて笑った。捲りあがった袖から出てくる腕は筋肉質で、山猫部隊といわれる兵士の中では、ベテランの部類に入るだろうか。

「銃を持っているが、まだ子供だ。日本は、もう大人の兵士がいないんじゃないか」

「殺す？ 命令どおり捕まえる？」

若い兵士がガムを左頬に寄せて聞く。

中年の兵士はヘルメットの中に手をいれて頭を掻いた。

「こんな子供を殺してもな、手柄にならんからなあ。祖国に帰ってから、教会で懺悔するのも面倒だ」

会話は、アメリカの英語。多少だが何を話しているかくらいは清四郎も分かる。清四郎は二人のアメリカ兵を見ながら、両側にあつた銃と無線機を掴んで、突然走り出した。

「しまった。逃げやがった」

中年の兵士が舌打ちをして清四郎を追いかける。若いアメリカ兵もあとに続いて追うが、中年のアメリカ兵が先に息切れをして足が遅くなり、前に出た若いアメリカ兵が清四郎のあとを追った。

「待て！ 逃げるな！ 殺しはない」

熱帯植物が覆う暗闇に響く英語。

もちろん清四郎に聞こえていたが、今の清四郎は逃げ切つて、またアメリカ兵を殺す事しか考えていない。

日本人特有の小柄な体型は、生い茂る熱帯植物の間をぬつて逃げるのに適している。

清四郎はアンガウル島に生息する野生動物のように軽快に走つて、追つて来るアメリカ兵を引き離れた。走りながら涙を流す。今も日本劣勢が信じられないからだ。

「どうして。どうして日本が負けるのか？ 誰か教えてくれ」

泣きながら走っていた清四郎は、涙で前が見えなくなり、熱帯植物の大きな葉が顔に当たった事もあって、脚が纏れて転倒した。地面に転がる清四郎。

何回か転がって見えた先に無線機が落ちている。そして、後ろには銃が落ちている。

清四郎は起きて立ち上がり後方にある銃まで走ろうとした。だが、追いかけてくる若いアメリカ兵の姿に気付いた。

銃を拾いに行けば追いつかれる。

清四郎は身を翻してまた走り出した。途中にある無線機を拾い更に走った。無我夢中で走った。もう涙は出てこない。

走り続けた清四郎の心は、静かに日本劣勢の事実を受け入れている。

後方を確認する。もうアメリカ兵は追いかけてこない。どうやらうまく逃げ切ったようだ。

広くないアンガウル島。数ヶ月もの間、戦いで走り回った清四郎の頭には、アンガウル島の地図が自然と入っている。

この辺りには、待ち伏せ攻撃の時に使った洞窟があるはず。

暗闇の中を見渡せば、見覚えのある熱帯雨林の並びがある。そう。木々を目印に歩けば洞窟の入り口があるはず。

小走りで移動する清四郎の記憶どおりに、洞窟は夜の暗闇より暗い口を開けていた。

清四郎は洞窟に入った。壁を見ると火炎放射で焼いた跡がある。

足に軟らかい感触を覚えて下を見ると、日本兵の死体があった。火炎放射で焼かれているため肌は炭化し肉組織が縮み手足の関節が曲がった状態で倒れている。暗くてよく見えないが、死体は洞窟の奥まで散乱しているに違いない。

次に腐敗臭が鼻から入り喉の奥を強張らせた。普通の人なら既に吐いているだろう。だが、清四郎はもう慣れてしまっていた。吐き気も無く、涙も出てこない。

悲しむ前にする事がある。死体の装備を見て回り、食料や使える

ものを集めなければならない。

しかし、アメリカ兵が奪取したようで、全ての死体は何も持っていないかった。

だから、多分もう、アメリカ兵はここには来ない。そう予想して、清四郎は洞窟の奥に身を潜めた。

第8話

夜という事もあって洞窟内は真つ暗だ。象牙色の美しい鍾乳石も今は見えない。

清四郎は、まだ落ち着かない息を整えながら地面に座り込んだ。当然、日本兵の焼かれた死体に囲まれている。座つてすぐにひんやりした感触が尻に伝わる。地面は、鍾乳石から滴り落ちる水で濡れているが、今の清四郎は全く気にせず、無線機のスイッチを入れるとスピーカーに耳をつけた。

聞こえてくる声が小さい。

ここまで電波が届かないのかと思った清四郎は、出口近くまで移動して、またスピーカーに耳をつけた。

今度はちゃんと聞こえてくる。悲しい日本軍の劣勢の事実が。

清四郎は、分かる英単語を拾いながら、刻々と知らされる情報に、静かに涙を流した。

だが、突然内容が一変する。

聞こえていた英語が、なんの前触れも無く日本語に変わったのだ。

「聞こえるか？ 死んではいけない。生き延びるんだ。村上清四郎！」

「え！」

清四郎は自分の耳を疑った。

聞こえたのは男性の声だった。しかも訛りのない綺麗な発音の日本語。一瞬父親かと思ったが、父親の声は、どちらかという和高い。アメリカ軍の人間が、日本語を真似して言っているのだろうか。では、なぜ清四郎の名前を知っているのか？

「なぜ僕の名前を知っているんだ！」

無線機で返事をするべきか。しかし、相手がアメリカ軍の人間だとしたら、清四郎の生存が相手に分かってしまう。それに銃刀でアメリカ兵を殺し回っている日本兵が誰なのか探しているかもしれない

い。

疑心暗鬼になっている清四郎に、また無線機から声が届く。

『清四郎。我が友人よ。私を信じて欲しい。君はいずれ逃げ場を失い、アメリカ兵に囲まれる。だが、どんな事があっても、死を選んではいけない』

清四郎は、また聞こえてきた声に耳を傾ける。

中年男性のとても落ち着いた口調。訛りのない標準語。聞き取りやすい発音。訓練されたアナウンサーのように、一言一句丁寧に話している。

第9話

この日本語は、誰の声なのか？

清四郎は、記憶の底までも探すが、該当する者はなく、全く分らなかった。

捕虜になった日本兵が拷問に耐えかねて、戦っている日本兵に投降を呼びかけているのだろうか？

「生き恥を晒すくらいなら、自決したほうが増しだ」

しかし、銃は転んだ時に落としてしまったので、自分自身を撃ち抜く事はできない。

清四郎は、懐にある短刀を確認する。自宅を出る時に、もしもの場合を考えて母親から渡された短刀。刃の短い短刀に、相手を殺すほどの殺傷力はない。首の急所を斬って自決するためだけの短刀である。

頑なに旧日本軍の教えを守る清四郎に、謎の声は今も語り続けていた。

『清四郎。多分、君は、鍾乳洞に隠れているはずだ。外はもうアメリカ兵でいっぱいだ。今、外に出れば、確実に火炎放射器で焼き殺されるであろう。今はまだ見つからない。まだその時ではない。だから、安心して眠るがいい。おやすみ。清四郎。また明日にでも我が友人よ』

短いハウリングのあと、言葉は急に英語に変わった。また、日本軍の劣勢の会話になっている。

清四郎は、耳につけていた無線機を耳から外して、じっと見た。スイッチをオフにする。

「なぜ僕が鍾乳洞に隠れている事を知っているんだ。どうしてアメリカ兵が外にいる事まで知っているんだ。今の声は誰なんだ？」

清四郎を友人と呼ぶ声は、まるで未来を知っているかのような口調だった。

外でアメリカ兵が行き来しているのは、先ほどアメリカ兵から逃げてきた清四郎でも想像がつく。しかし、声の主はそれを見ていないはず。少なくとも清四郎の周りには、二人のアメリカ兵のほかは誰もいなかったはず。

「まさかご先祖様？」

父方の？ 母方の？ 死期の近い清四郎のために出てきて下さったのか？

考え悩む清四郎と共に、夜はどつぷりと更けていく。

もう銃声は聞こえない。虫の声が聞こえるだけ。

清四郎は瞳を閉じた。秋になると日本でも聞こえる虫の声。

「きつと日本は、今、秋なんだろうな」

無線機を持っていた手がゆっくりと落ちて腿の上に載った。清四郎の口が徐々に開いていく。

清四郎はいつの間にか眠っていた。十人以上も白兵戦でアメリカ兵を殺した清四郎の十五歳の体は消耗しきっていたのだ。

もう水も食料も無い。ただひたすらに眠るだけ。

明日はどうなるのか？

今の清四郎は、もう二度と感じる事はないかもしれない安らぎの中で眠り続けるのであった。

焼け死んだ日本兵の死体たちと共に。

第10話

清四郎は、頬を軽く突かれて眼を覚ました。

陽は既に昇っていて、鍾乳洞の中にまで光が入り込んでいる。

目の前にいたのは、昨夜追いかけてきた二人のアメリカ兵だった。

アメリカ兵の後ろには、暗闇では見えなかった象牙色の鍾乳石が、天井からは垂れ下がり、地面では石柱として見えている。その石柱の鍾乳石を隠し囲むように焼死した日本兵が散乱し、赤く見える人肉にはウジが湧いていて互いの体を擦り合わせながら蠢いている。

清四郎が逃げ込んだ洞窟は、身の毛もよだつ地獄絵巻の背景が広がっていた。

中年のアメリカ兵が白い歯を見せて英語で言った。

「ボーイの足跡は、大人より小さいから、とても分かりやすかったぞ」

現在の硬いアスファルトではない土の地面は足跡が残る。

二人のアメリカ兵は冷静に判断をして、夜に清四郎を追うのをやめ、夜が明けるまで休息してから、地面にある清四郎の足跡を見ながら追って来たのだ。

清四郎は後悔した。無線機で聞いた日本劣勢の事で頭がいっぱいで、足跡を消しながら移動するのを忘れていた事を。何のために先輩兵士から学んだのか。

「くっ」

清四郎は悔しさで奥歯を噛み締めた。奥歯がギリギリと鳴る。

「生き恥を晒すつもりはない！」

そう叫んでから、清四郎は胸の装備を触った。胸には手榴弾が二つある。両手に持って同時に使えば、目の前にいる二人のアメリカ兵を道連れにして自決する事ができる。

しかし、清四郎の胸に手榴弾は無かった。

二人のアメリカ兵は、清四郎が眠っている間に、清四郎の装備を取り去っていたのだ。無線機も無い。

「はっ。手榴弾が無い。そんな……」

「カミカゼ。サムライ。死ンデハ、イケナイ」

若いアメリカ兵の片言の日本語。

しかし、今の清四郎に、笑顔で話すアメリカ兵の思いは通じなかった。

内ポケットに母親から渡された短刀がある。アメリカ兵は短刀には気付かなかったようで、清四郎が軍服の奥に手を入れると、体温で生暖かくなつた短刀が指先に触れた。

清四郎は、素早く短刀を取り出し、鞘を抜いて刃を首に当てた。

「日本万歳！」

「ノオオー！」

清四郎の叫びと同時に聞こえる二人のアメリカ兵の叫び声。

そして、次に響いた銃声。

清四郎は、目を見開いた。胸を押された感触。そのあとの激痛。

清四郎は、短刀を落として胸を押さえた。目眩で立っていられず、地面に両膝をつけた。

清四郎は、撃たれたのだ。

撃つたのは若いアメリカ兵だった。

中年の兵士が止めようとしたようで、若い兵士の前に手を出した状態で立っていた。

「なぜ撃った？」

低く呟くように聞いた中年の兵士に対して、若い兵士は震えながら答えた。

「攻撃してくるかと思って……」

若い兵士が人を撃つたのは初めてのようだ。

強く言う中年の兵士。

「ボーイ。しっかりしろ！」

「死んじゃダメ！ 生きて！」

アメリカ兵が持っていた無線機から、日本語が聞こえた。それは昨夜聞いた声とは違う声だった。

その声を聞いたあと、清四郎は意識を失った。

第11話

清四郎は気が付いた。同時に聞こえる日本語と英語。違和感を感じて眼を開けた。

そこは、アンガウル島のアメリカ軍の医療テントだった。

清四郎の周りには負傷して運ばれた日本兵がいて、元気な者や意識がなくて呻いている者がいる。

ベッドに横たわる兵士の痛々しい姿は、激戦だった事を物語っているが、何回も戦いを経験してきた清四郎にとっては、もう嘆き悲しみを感じない見慣れた光景だった。

離れた先では、負傷したアメリカ兵がいて、手当てのために救護のアメリカ兵が行き来していた。

清四郎は体を起こした。胸に痛みを感じる。痛みは右乳の上辺りからだった。包帯で巻かれているため痛い場所がどうなっているかは見えないので分からない。

清四郎が痛みに堪えながらゆっくりと起き上がると、隣にいた日本兵が声を掛けてきた。

「あんたは運がいい。撃たれはしたが、弾があたったのが装備の金具の上だったとかで、胸の骨にヒビが入った程度ですんだそうだ」
そう言った隣の日本兵はベッドに横になっていて、両足は膝から下が無かった。爆撃を受けたか地雷を踏んだかで両足を失ったのだろう。足に巻かれた包帯は血が滲み赤く染まっっていて、数匹の八工が包帯の血を舐めたがってたかっている。

清四郎はベッドから足を下ろした。右手を動かすと右胸に痛みが走る。かなりの激痛だが動けない事はない。清四郎は地面に足をつけて立ち上がった。ゆっくりと視線を動かして周囲を確認する。

医療テントの周りには、銃を持ったアメリカ兵がいて、負傷した日本兵を見張っていた。

清四郎は静かに歩いてベッドから離れた。

すぐにアメリカ兵がやってくる。清四郎に銃を突きつけて、ベッドへ誘導する。

清四郎は誘導にしたがって歩きながらアメリカ兵の装備を確認した。

アメリカ兵は、銃も手榴弾も短剣も持っている。

村上水軍の兵法に、敵の船に乗り込んだ場合、敵の装備を奪い敵の装備で戦う戦法がある。

胸の痛みはどうって事はない。今から戦うべきか？

清四郎の体に力が入るものの、空腹と今の体力、周りにいるアメリカ兵の人数を考えて、不利な戦いになると判断した清四郎は、大人しく自分のベッドへ戻った。

先ほどの両足の無い日本兵が優しく迎える。

「戦うつもりだったのか？ 無駄だ。何人かの日本兵はここで戦ったが、誰も殺せずに撃たれたり自決したりして死んでいったよ」

清四郎はベッドに腰掛けた。

「僕は、村上清四郎。二等兵です。あなたは？」

「僕は、吉村留吉。通信兵です」

留吉は二十歳くらいの青年だった。左目の下には、戦いで負傷して横一文字に五針縫って治療した古い傷痕がある。

留吉は、笑顔になって続けて言った。

「少ないけど、食事もです。何もしなければ、最低限の治療もしてくれる。大人しくしていた方が身のためですよ」

清四郎は、返事をしなかった。首を縦にも横にも振らずにいる。

じつと留吉を見据え、静かな口調で聞いた。

「日本が負けてもいいんですか？」

留吉は急に顔色を変えた。

「その話はしないでくれ。見つかつて君に協力したと思われたら、どんな酷い目にあうか」

うつたえる留吉を見て清四郎はゆっくりと溜め息を吐いた。無言で体の向きを変えて、ベッドに横になった。寝返りを打って留吉に

背を向けた。「日本の恥。情けない」清四郎は留吉に対して思った。食事は朝昼晩と三回出た。パン一切れと水のみだったが、今の清四郎にとっては十分な量だった。

アメリカ兵の会話によると、アンガウル島は既にアメリカ軍が占領したようだ。清四郎が医療テントに来て二日経った今も負傷した日本兵が運ばれてくる。

彼らの情報によると、生き残ってまだ戦い続けている日本兵がいるらしい。

清四郎は、決心をした。今夜、ここから脱出し、生き残っている日本兵と合流して、また戦おう。と。

第12話

アメリカ軍の医療テントは、夜中になっても静かにはならない。重傷で昏睡状態の負傷兵は、呻いたり叫んだりして、時には口や鼻の穴から異臭のする吐瀉物を垂れ流している。

見張りのアメリカ兵はテントの中や外を歩き回り、装備は金属音をたてていて、眼を閉じていても居場所が分かるくらいにうるさい。ベッドに横になっていた清四郎は眼を開けた。寝起きの眠そうな表情はなく、瞳が血を欲しがる野性の猛獣のように辺りを見回している。

隣のベッドの留吉は、静かな寝息をたてている。

清四郎は、留吉に無言で別れを告げると、寝返りを打って、そのままベッドから落ちるようにして、足から地面に着地した。同時に、撃たれて骨にヒビが入っている右胸に激痛が走る。息を飲んで痛みに耐える清四郎。ゆっくりと息を吐いて、体を痛み慣らしてから、清四郎は第一匍匐前進で静かにベッドの間を移動した。

テントのシートに見張りのアメリカ兵の影が映る。

まだ気付かれてはいない。

清四郎は、見張りの兵の間をぬって、たどり着いたテントのシートを捲って外に出た。しゃがんだまま見上げれば先ほどの影の主であるアメリカ兵の背中が見える。

勝てる。そう思った清四郎は、静かに近づいてアメリカ兵を後ろから襲った。体格は十五歳の清四郎の方が明らかに小柄だったが、柔術を使いあっさりと大柄なアメリカ兵を倒した。

銃を奪った清四郎を見て、アメリカ兵は地面に横たわって声をあげながら命乞いをしている。アメリカ兵はまだ若く、戦いの訓練を受けていないのかと思うほど情けない姿を晒していた。

清四郎は銃口をアメリカ兵に向けた。

このアメリカ兵は何人の日本兵を殺してきたのか。

思えば思うほど怒りが込み上げてきて、清四郎は鬼の表情でアメリカ兵を睨んだ。

その時、アメリカ兵が装備していた無線機から声がした。

「いけない。清四郎。君が、しなければならぬ事は、人殺しじゃない！」

洞窟で聞いた中年男性の声。

「誰だ？ 日本人なのか？ なぜアメリカの味方をする？」

条件反射で声を出した清四郎だったが、通話ボタンを押さないと会話できない事に気付いて、清四郎は銃を構えたままアメリカ兵に近づき、アメリカ兵の腰にあつた無線機を筆取り取った。

同時に周りから英語が聞こえる。

ほかのアメリカ兵が異常に気付いて集まってきたのだ。

清四郎は、アメリカ兵から奪った銃と無線機を持って逃げ出した。走りながら無線機の通話ボタンを押す。

「こちらは、第十四師団配下宇都宮歩兵第五十九、村上二等兵であります。誰でもいい。応答して下さい」

「という事は、今は、アメリカ兵から奪った銃と無線機を持って、逃げてる途中だな」

中年男性の声で返事が返ってきた。

第13話

この声だ！　と思つた清四郎は、必死になつて無線機に向つて叫んだ。

「誰だ？　なぜアメリカ軍の味方をする？」

「アメリカの味方をしているのではない。未来を変えないために、君と話しているんだ」

「未来を変えないため！？　何を言っているんだ」

驚き戸惑う清四郎の叫び声に対して、中年男性の声は今も落ち着いていて静かに清四郎に告げた。

「清四郎。君は生き延びて、アメリカ軍に加わり、捕虜になつた日本兵の命を、一人でも多く助けなければならぬ。日本兵を自決させてはいけぬ」

「僕がアメリカ軍に。僕は誇り高き日本男児だ。何があつてもアメリカ軍に加わつたりはしない。お前はアメリカ兵だろ。騙されるものか！」

清四郎の叫びのあとに、突然無線機から別の声がした。

「お願い。生きて。死んだらダメなんだって！」

「今度は誰なんだ？　お前もアメリカ兵なのか？」

逃げながら混乱する清四郎。

なぜ無線機から別の声がするのか？

「いかん。過去と未来の時波のバランスが悪い。君と話せる時間がもうないようだ。いいか。未来のために必ず守ってくれ。君は自決してはいけない。投降するんだ。アメリカ軍に加わり、捕虜になつた日本兵を助け、一人でも多くの日本兵を祖国日本へ帰すんだ。必ず実行してくれ。村上二等兵。これは一人でも多くの日本人を助けるための極秘任務である。命令だ！」

この言葉を最後に、無線機から聞こえる言葉は英語に変わった。

清四郎は、走っていた足を止めた。無線機を見ながらゆっくりと

歩く。

「僕は、騙されているのか。それとも、本当に極秘任務なのか」

困惑して銃と無線機を持って歩く清四郎を、追いついたアメリカ兵が取り囲んだ。アメリカ兵たちは清四郎に銃口を向けた。

張り詰めた空気。しんと静まり返る闇夜。動かなくなった清四郎とアメリカ兵。

アメリカ兵たちを目の前にした清四郎に殺気が漲る。

山猫部隊と呼ばれるアメリカ兵たちが清四郎の殺気に気付かない訳がない。

清四郎の脳に、後藤少佐の「一人一殺」の音が響く。こっそりと干し米を食べさせてくれた佐山軍曹の瘦せてツクシのようになってしまった姿も思い出す。両足を失った留吉の寝顔も。

清四郎は銃を持ち上げた。

「ダメ！ 生きて！！」

また無線機から日本語の音が響いた。それはたまに聞こえてくる別の声。

もう一人の声は誰なのか？

清四郎は、持ち上げた銃を地面に投げた。無線機も地面に投げた。アメリカ兵は、無防備になった清四郎を取り押さえた。容赦なく清四郎の腕を掴むアメリカ兵。

清四郎の右胸に激痛が走り、清四郎は表情を歪めて呻いたが、瞳はずっと無線機を見ていた。そして泣きながら叫んだ。

「日本は負けるのか？ どうあっても、勝てないのか？」

英語しか聞こえなくなった地面の上の無線機を睨みつけながら。

第14話

平成のアンガウル島。

波の音しか聞こえない浜辺に老人が一人で砂浜に腰を下ろしていた。

陽はまだ高く、十一月になってもアンガウルの蒸し暑さは変らない。

その老人の名は、村上清四郎。平成の今は、九十を過ぎた年齢になっている。頭髮は禿げ上がり、多少残っている毛は白髪が殆ど。

第二次世界大戦の一九四四年十月にアメリカ軍に捕らえられ、捕虜として戦艦の独房に閉じ込められた清四郎は、十月末に十六歳の誕生日を迎えた。清四郎は、独房内で処刑の順番待ちだろうと覚悟を決めていたが、アメリカ兵士が清四郎を処刑する事はなかった。

清四郎は独房期間を過ぎてから解放されたのだ。翌年の八月に終戦となり日本へ帰れるチャンスが訪れたが、その時の清四郎は首を縦に振る事はなかった。

清四郎は、アメリカの学校に通う事になり、通いながら終戦後も現存する日本兵の救出活動にあたった。

戦後直後の日本人は、アメリカ人と一緒にいる清四郎を見ると、「裏切り者。日本の恥」と罵った。

大学を卒業した清四郎は、何を思ったのか神父の道に進んだ。その数年後にアンガウル島に戻ったのである。

平成の今も砂浜に腰を下ろしている清四郎は頭が禿げた白髪の神父の姿をしていた。手には戦後に手に入れた旧アメリカ軍の無線機がある。無線機のアンテナは伸ばしてあり、小さい音だが、現在は砂嵐のザーという音が聞こえるのみとなっている。戦争が終わり平成になった今は、旧アメリカ軍の無線機は何も受信しないのだ。

普通ならば。

清四郎は、砂嵐の音がし続けている無線機の通話ボタンを押した。

マイクに向って話し出したのである。

「ついに僕にも迎えがきたよ。息子や娘は、早く栃木に帰って来いと言つて、再三手紙をよこしてくる。アンガウルにも日本があるんだが、私の子供たちは、納得してくれないようだ」

清四郎が通話ボタンから指を離れた時、無線機から聞こえていた砂嵐の音がやんだ。

『清四郎。家族は大切だと思う。私は卵から生まれたので、家族というものを知らなかったが、君たち地球の影響を受けて、今は家族の大切さが分かるようになった。そろそろ、故郷に帰ったらどうだろうか？』

無線機から聞こえてきた低音の中年男性の声を聞いて、清四郎は小さく笑った。笑いは小さかったが、顔を覆ったシワの数はかなり多い。

「君も、帰れと言うのか。アンガウルには、日本人が建設した神社仏閣がある。戦争で死んでいった多くの日本兵の墓もある。そして僕は、神父として、寺の住職として、神社の神主として、みんなを弔っていかねければと思っている。今も。命ある限り。アンガウルには、まだ日本があるのだから。それに、アンガウルでないと君と話せない。君と話ができないのは淋しい限りだ。なぜ、アンガウルにいる時だけ、君との会話が可能なのだろう」

『それは時波の影響によるものだからだ。その影響は、私のせいなのかも知れないが、今の私でも解明できずにいて、もどかしい。一時期、清四郎と会話ができなかったが、またそのサイクルが近づいている。清四郎がアンガウルに残っても、私との会話は不可能になるだろう。だから、日本に戻ったらどうかね？』

「そうか。また君と話せなくなるのか。もっといろいろと君から学びたい事があったが」

無線機で話していた清四郎は、突然肩を叩かれてハッとした。見ると、五歳くらいの島の子供がカゴに入った果物を持って清四郎に差し出していた。

「神父様。ママが渡してつて。この前のお礼だつて」

「ありがとう。ママにも、そう伝えて下さい」

「うん」

清四郎が子供の後ろを見ると、車道に母親が立って清四郎たちを見ていた。清四郎と目が合ったと感じたのか、母親は清四郎に手を振った。

清四郎も手を振り返す。

「ママが待っている。そろそろ行きなさい」

「うん。またね。神父様」

「ああ」

清四郎は子供が離れてから、無線機を耳に当てた。もう砂嵐の音しかない。通話ボタンを押して話しかけたが、返事もなかった。

「僕の家族に気をつかつて、ワザと返事をしないのか。通話不可能なサイクルに入ったのか。要するに、日本へ帰れという事なんだね」

清四郎は、相手に届いているか分からなかったが、通話ボタンを押してもう一度話しかけた。

「僕は寿命がきてしまった。今年か、来年か。いつまで生きれるのか。進行は遅いが、内臓に癌があるらしい。生きているうちに、君に会いたかった。君が今も使っているコンピューターに記録されている砂浜。君が見ていたという、君の故郷の砂浜を見てみたかったよ。クラム」

清四郎は言ってから無線機を砂浜に置いた。

島の子供は、母親と手を繋いで一緒に歩いていた。振り返っては、無線機を持っている清四郎を見たりしていた。

「神父様が無線機を置いたよ。お話が終わったのかな？」

「きつと話が終わったのよ。島にいらっしやった時から、変わり者だったけど。神父で住職で神主だと聞いた時は、変人だと思って、みんな怖がったものよ」

「神父様は、善い人だよ」

「ええ。とっても善い人。そして不思議な人。癌があつて、もう末

期で、体のあちこちに転移しているそうだけど、歩いて浜辺にいらつしやる。未だに歩けるのは、天から恵を受けている証拠ね」

「凄いいね。神父様」

「ええ」

話しながら親子は車道の彼方へと消えていった。

清四郎は、ずっと砂浜に座っていた。陽は今も高い位置にあつて蒸し暑い。

清四郎の傍らには、スイッチが切られた旧アメリカ軍の無線機が置かれていた。清四郎は、胸のポケットから手帳を取り出した。間には写真が挟んである。

「日本に帰ってからの話し相手は、孫になるのだろうか」

写真には、四つん這いになっている乳児が写っていた。

「華雅里。平成になって、君に会う事になろうとは、全く予想してなかったよ。終戦後、同じ昭和時代に生きていると思って、どれほど君を探した事か。クラムも意地悪だ。教えてくれればよかったのに」

清四郎は、写真が挟んである手帳を閉じて、胸ポケットに手帳を入れた。禿げて天辺に頭髪が無いのに、両手で髪を掻きあげるしぐさをしてから、立ち上がった。ゆつくりと砂浜を歩く。

パラオ環礁の外にあり、激しい波が打ち寄せるアンガウル島。近寄りがたい島には、今も島民が住み、隠れバカンスの地になっている富豪がいて、たまに訪れる日本の観光客と戦争の遺族がいる。

今後は誰がアンガウル島の戦没者の墓の管理をしていくのだろうか。

汚染されていない空気は、アンガウル島の青空を高くしている。

時折吹く風は、砂浜にある清四郎の座っていた跡と立ち去った足跡に、砂を流し込んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8664h/>

韜晦の想い

2010年10月8日15時58分発行